

石川淳選集

第一卷

石川淳選集 第1巻 (全17巻)

1979年11月7日 第1刷発行 ©
1980年1月14日 第2刷発行

¥ 1300

著 者	いし	かわ	じゅん
	石	川	淳
発行者	緑	川	亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

葦手	五
山櫻	六
普賢	八
マルスの歌	二七
曾呂利咄	二五
張柏端	二五
鐵拐	二五
雪のはて	二四
黄金傳説	二五

無盡燈

燒跡のイエス

三七

三二

小
說
一

葦

手

一

神樂坂の肴町から矢來へ向ふにぎやかな大通を途中で左へきれ、急にひつそりとする小路を縫つて、一月なかばの夜の寒さに表を閉ざした家並のなかを下駄を鳴らしながら歩いて行くうちにそこだけ一軒硝子戸越しにぼんやり燈の色が流れてゐる煙草屋の前に出ると、先に立つた河本仙吉藝名清元卯太夫がびたりと足をとめ、その明るみをおそれるやうに角袖外套の襟を深く立てながらふり返つて長身をかがませ、「え、喬さん。」と聲をひそめて、「ここだよ、この奥なんだよ。」仙吉のあごでさしたのは煙草屋の角をまがる狭い露地の闇で、いつしよにのぞきこんだわたしの眼にはただ暗い

ばかりで見當もつかなかつたが、ちつと瞳を定めるにつれて、兩側の長屋普請とすぐ知れる二階建の、その粗い格子戸から洩れる電燈に中のけしきが茫と寫し出された。思ひのほか奥行のない露地で、兩側の長屋といつても二軒づつおなじやうなのが向ひ合つてわづかに四軒、それも米材べいざいの肌がいやに光る新築ではなくて軒端かたむくかに見えるほど黒ずんだ年代物。突き當りはあまり高くない石垣で上には何やら西洋館らしいのがそびえてゐたが、その石垣の眞下にあるのが震災をまぬがれた土地柄だけに今日の東京にはめづらしい共同水道、雪達磨さながらすつぽり藁に包まれ水を吐く口と鍵をさしこむ耳だけが出てゐようといふ古風な栓で、それがあるだけ道幅にゆとりができてはゐるものの眞中を走つてゐる溝板は油斷がならず、踏めばばちやんと刎ねかへりさうな恰好であつた。「いや、こりや風雅なお住居だな。この奥に妾宅ありた氣がつか

ねえ。ここへわれわれどてらのお客様が乗りこむんぢや、浪人者さんするなる身なりにて出で来りと、ト書
が附かなきや納まらねえところだ。」

神樂坂裏の小料理屋からしやべりあつて來た調子が
まだ抜けず、わたしがつい高聲になるのを、仙吉はい
つもの癖の急に小さい眼を狡猾さうにきよろきよろと
廻したのであらう、色眼鏡をこちらへきらりと光らせ
ながらおさへるやうな手つきをして「こーれ」といふ
とともに、つつと露地の中へ歩き出したのにわたしも
釣りこまれてはひつて行くと、右側の奥の家、共同栓
の横手に格子戸も臺所の戸もならんでくつ附いた、そ
の上り口をがらりとあければやつと足を踏みこめるほ
どの狭い三和土たきのつい鼻先が障子で、表の物音にそれ
と知つたのか、向うからひとの近づくけはひがしてそ
の障子がさつとあき、「あら、いらつしやい。」女にし
てはややせいの高い、ぐにやぐにやしたからだつきの、

ふんと白粉のにほひをさせながら肩から乗り出したの
が、仙吉の後にわたしをみとめると斜に身を引いて中
腰になり、「あ、お客様。どうぞ。」仙吉の上るのをよ
けながら燈を背に障子の影になつたので女の顔かたち
はわからなかつたが、その代りあけ放した家の中は一
眼で見通され、壁一重で臺所と仕切つてある上り口の
二疊の、そのさきは六疊で、ここは外の作りとは打つ
て變つてあかあかと電燈がかがやき、安物ながら長火
鉢、ちやぶ臺茶簞笥などいづれも新調らしく、壁には
三味線が二挺、部屋の片隅には小さい置炬燵にかけた
友禪の蒲團の花模様が陽氣に浮き出てゐた。ただし、
そのそばに縫ひかけとおぼしくひろげられた反物はど
うしたものか小紋のひどく澁い柄……と見る間に女は
奥へ驅け入つて、六疊の向うの障子をあけ、九尺ほど
の縁側から天井をのぞくやうにして、「かあちゃん、お
客様よ、仙さんと、どなたかお友だちの方。」とたんに

二階でみしみしといふ音といつしよに何かいらへが聞えて來たが、そのあひだに仙吉はもうするすると炬燵に膝を入れ、まだ上り口に立つてゐたわたしに「さあ、喬さん、寒いからこつちへ。なあに、ちつとも遠慮はいらねえよ。」

そもそもこの場の状況を述べるまへに、仙吉のやうな藝人とわたしのやうな不粹者と、異様な取合せの出來上るに至つた由來から説きおこすのが順序とはいへ、その前置を述べ出した日にはちよつと一口ではかたづかぬ長ばなしとならうし、またさしあたりそれにはふれずともすむ。しかしこの附合のはじまりは元來わたしの友だちの薩摩屋銀二郎が仙吉とは中學校以來の仲間であるといふ縁に由つたもので、じつはその銀二郎もやがてここにあらはれる段どりになるのだから、この間のいきさつは追つてのこととして、今わたしは部屋の中にはひりながら何となく世帯じみたにほひを感

じて、「これはしんみりしてまた一味ひとあちだな。」とことばに出すと、女はそれを世辭と取つたのか、あわてて針箱を隅へ押しやり、「まあ、とんでもない。狭いところで散らかつてをりまして……」そこへ梯子をおりて來た母親らしいのが闕ぎはにべつたり坐ると東北訛の太い聲で、「いらつしやいまし。」男のやうにがつしりした硬ぶとりの體を木綿著物の下に突つ張らせて、色白の肌理きめはこまかいが眼鼻だちのごつごつした、これはひどく田舎くさい五十女であつた。「梅子に、おつかさんです。」と仙吉がちよつとあらたまつて、「こちらはね、喬さん。かねてお噂をした詩人黒木喬先生。」詩人といふのはわたしの渾名で、挨拶が一通りすむと仙吉はもう調子が崩れ、「ところで、さつそく酒だ。まだあるだらう、ゆうべのが。」「あら、そんなにないわよ。」と梅子もぞんざいになり、「二三合ぐらゐぢやない、ねえ、かあちゃん。」「ああ、とてもたりやしま

せんよ。買つて來ませうか。」「ぢや、すみませんがひとつ。」と仙吉はふところから紙入を出し、「ええ、まあ一升。それに何か餌^{えさ}を見つくるつて。あとからもう一枚加はるんでね、銀さんが。」「あ、銀さん。」と梅子が、「こないだいらした。」「ああ、薩銀、九時半にここに來るつてえ約束なんだ。」「さう(茶簞笥の上の眼覺時計を見て)ぢや、まだちつと間があるわね。かあちゃん、風邪ひかないやうにしてらつしやいよ。つなぎに残つてゐるのつけませうか。」

銅壺に徳利を突つこみちやぶ臺に小皿などならべる梅子を今わたしはゆつくり眺めることができた。二十を一つ二つ越したか、伏せた眼もとの愛嬌でしやくれ顔の難をかくし、結ひたての髪の重みに細い頸をしなはせてゐる、それは何のたわいもない下町風の娘であつた。先刻小料理屋ではなしに仙吉が、「じつは今度ちよつとした足だまりを拵へてね。ああ、うちのは

うへはもちろん内證なんだが、つまりわれわれのクラブ同様にしようつてわけさ。みなさんにも遠慮なく利用してもらつて、親類同様にどうぞ。銀さんにはこないだ紹介したんだが……」と切り出したのに、「菴主はさだめし」と水を向けると、「いや、それがね、そんな粹なんぢやないんだよ、ただおとなしいのが取柄で、それに……」と早くも調子に乗りかけたのを軽く聞き流して、女の素姓を深くもたづねずに來たのだが、かうして見たところ、およそ興味のもてぬ梅子であるうへに、總じて小ざかしい家庭の仕組が何より苦手のわたしとしてはちよつと質に取られたかたちで、やがてもどつて來た母親のおしやべりも上の空に銀二郎の驅附を待つばかりであつた。

「銀さん、遅いわね。」「うん、さつき店からまはるつていつてたが、ちかごろ、ひどくいそがしいさうだから。知らないかい、喬さん。」「何を。」「薩銀の店の

ことさ。「いや。」「八丁堀さんもだいぶ曲つて來たさうぢやないか。おとつつあんの病氣以來やつぱりよくないらしいね。」「そんな噂は聞いちやゐるが。」「神戸の店は兄貴がしつかりものでいいさうだが、肝腎の本店がぐらついてちや、若檀那銀二郎ダンスばかりやつてもゐられねえだらう。」「なに、あいつは重寶な生れつきで、ダンスにも夢中になれるし商賣にも夢中になれるし。」「こないだ、さういつてらしたわ。あたらしい罐詰の宣傳でおいそがしいんだつて。とても景氣のいいおはなしだつたわ。」「そりや食料品ぢや古い店だから、すぐにお辭儀もしねえだらうが、さて銀二郎の罐詰賣、いつまでつづくかね。」「と仙吉は伸びをしながら、「あんまり待たせると出かけちやふぜ。」「お出かけつて、これから。」「ああ、銀座へでもと思つて。ねえ、喬さん。」「出かけないまでも一應さういつてみる手と、わたしは調子をかへて、」ときに、銀さんちか

ごろ大森へ歸らないさうぢやないか。」「へえ、アパートのはうへね。」「けさちよつと電話をかけてみたんだが、二三日お歸りになりませんなんだ。」「すると、あの子は。空閑を守つてゐてえわけか。」「それがわからねえ。」

そのときばかばかと威勢のよい靴音とともに格子があき、「失敬、遅くなつちやつて。」とニッカーをはいた逞ましい脚で上り口から一またぎ、立ちかけた梅子を押しもどすやうに鼻先へ菓子折らしいのを突きつけながら、「梅ちゃん、こないだは。へえ、おみやげ。どうもいそがしくつてね。」「バンド附外套のふくれたのが障子いつぱいに立ちふさがつたかと思ふと、もう炬燵のそばにむずとあぐらをかいたのに、「いや、雲を起してあらはれやがつたな。」「と仙吉は氣壓されぎみで、「まあ、そのいきほひで一杯。今噂をしてたところだ。」「とさす猪口をやあと受ける相手の顔を見て、

「なんだ、底がはひつてゐるのか。どうりで。」「うん、すこし店を早く出過ぎたもんだからちよつと道草を食つてね。」「おいおい、われわれを待たしといて飲んでるやつはないだらう。」「いや、揚場町に寄つて來たんだ。」「揚場に。」「ああ、お師匠さんのところへ。」「あら、伯母のところへ。」「ええ、こないだこちらの歸りに仙さんといつしよに伺ひましてね、もうお眼見得がすんでゐるんです。そのせつ御馳走になつたもんですから、ちよつとお禮に。」「まあ、わざわざ。」「ところがあべこべに一杯。お弟子さんに貰つたのがあるつてんで。ついでに拔目なく御入門を願つて、うる覚えのあやしげなやつを浚つていただきましたよ。」「でも、伯母は風邪けだとか申してましたけど。」「ええ、若いほうのお師匠さんにね。」「あ、妙ちゃんに。」「すなはちお妙さんの三味線で、骨になるともなんのそのといふやつをいくさり。」わたしは何とも口の出しやうはなかつた

が、仙吉は露骨にいやな顔をして吐き出すやうに、「達者だなあ。」しかし斜に向いてしやべつてゐる銀二郎は氣がつきもせず、「ぼくはこれでもね、梅ちゃん、下地があるんだから大したもんでせう。むかし學校時代に仙さんといつしよにはじめたんです。ところがぼくは中途でやめる、仙さんは修業を積んでつひに今日の大を成したといふ次第。この男も（と仙吉をさして）質屋の若檀那にしちや出來過ぎたもんです。前垂を取ると卯太夫さんのお師匠さんで、しかも當時は漂泊の詩人黒木喬の親友なんざ……」「漂泊とはなんだ、ぼくも目黒にれつきとした……」「いや、これは失言。ときにどうだ、ちかごろそのお住居のはうは。」「わたしがこの質問をさりげなくそらさうとしたとき、をりよく仙吉が、「おい、銀さん、店がいそがしいもあんまりあてにやならねえな。また清元をはじめるんぢや、鐘詰のはうはどうなるんだ。」「なに、はじめるつたつ

て、ひまを見てときどき浚つてもらふぐらゐのところさ。鑑詰は本業だ。目下宣傳に努めてる。」「なにかい、宣傳は夜中でもやるのかい。」「え。」「かくしたつてだめだよ。ちゃんとねたが上つてゐるんだ。當時どちらの方面です。どうして大森へお歸りにならねえんだ。」「そ、そんなこたない。もつとも店が遅くなつたときにや、おやぢのうちに泊るが。」「うそをつけ。」

八丁堀の店の裏が薩摩屋の住居になつてゐたが、銀二郎は以前からそこにはゐず、畫描きになると稱してアパートにはひつてゐた。ポートも漕ぐセロも弾く唄の一つもといふ器用なたちで、中でも畫は一番身を入れただけに多少恰好がつき、げんに先年わたしがはじめて逢つたときもひとが畫學生として紹介したくらゐで、今の大森の部屋にも繪具箱カンヴァスの類が取そろへてはあるものの、それは表向の口實、ありやうは兩親に知られたくない女と同棲しようとの魂膽で、ち

かごろいつしよにゐるのは京橋のLダンスホールに勤めてゐるミドリと呼ぶちぢれ毛の小柄な娘であつた。

これはもと神戸の某ホールにゐたのを去年義兄の店へ視察に行つた銀二郎がふとした縁でつれて來たといふ當人のはなしであるが、わたしはしばらくミドリに逢ふ機會もなく、二人の仲がその後どうなつてゐるか全然わからず、銀二郎がアパートをあけてゐるといふことさへ今朝の電話で知つた始末で、仙吉にしても何も知つてゐるはずはない。しかし、ここにカマをかけられた銀二郎はあわてぎみで、「常談いつちやいけねえ。ここんとこ、ひどく堅いんだ。ところで、あんまり遅くならないうちに引揚としようか、喬さん。」「うん。」茹だりかけてゐたわたしがさつそく腰を浮かすと、またも仙吉が、「ぢやいつしよに出よう。まだ十二時おじかんにやちよつと間がある。どつかへ行つてみようぢやないか。」「夕方四谷の本宅にわたしが訪れたのをいいしほ

に、ついそこまでと丹前の上に外套を引つけて飛び出した仙吉なのだが、おなじ恰好とはいひながらわたしとちがつて洒落者の藝人がそのままの姿でカフェなどへ押し出さうとは思はれず、よし出かけたにせよ細君のやかましい身がまたこの隠れ家にもどつて泊るわけにも行くまいし、それに時間もないことなので、銀二郎とても相手の口先を眞に受けるはずはなく、「なに、そいつはまたにしようぢやないか。まあゆつくりしてつたらいだらう。われわれと付きあつてたらきりのねえはなしだ。ぢや、おやすみ、梅ちゃん、おつかさん。」もう靴をはいてゐる銀二郎の後からわたしがつと、上り口まで出て來た仙吉が、「ぢや喬さん、今夜は失禮。これからどうか遠慮なく。なに、ぼくがゐなくつたつてかまはねえ。歸りが遅くなつたときや、叩き起して泊つてつたらいだらう。ああ、いいとも、女ふたりでさびしがつてゐるんだから。」

外へ出ると急にむつつりした銀二郎が、それでも靴の歩調をわたしの足に合せながら一町ばかり黙つたままであつたが、突然にがにがしさうに、「ふん、仙公あれがいつまでつづくか。今度のやつをいつもの傳で抛り出しちや、ほんとにかはいさうだぜ。あいつ、癖がよくねえからな。」どうした。ひどく公憤を發してゐるぢやないか。「なあに……ところで、これからちよつと附合はねえか。」「附合ふつて、どこへ行くんだ。」「まあ、いいだらう。いつしよに來てくれ。」さういひながら、銀二郎はもう手をあげて通りかかつたタクシーを呼びとめてゐた。

二

ここまで書いて來たとき、わたしはびくりとしてペンを擱いた。もともと小説家めかしてこんなふうに書き出すとは柄にもないことといはれるまでもなく、か

かる卑俗な斷片を拾ひあつめ綴り合せて一篇の物語を作ることがそもそもわたしの文學する所以にかなふのであるかと、いつか高慢な料簡が頭をもたげて來たのであるが、しかし實のところわたしは著物の柄など例へばちらりと見えた長襦袢の模様は何何と仔細に記してみたいといふ妙な病があつて、今も口はばつたいことをいふそばから梅子の著附をくはしく書いておいたはうがと一ぱし作者きどりの思案投首のていでゐるほどなのだから、ここにペンを擱いたのは右の思ひ上りのせゐではなく、ちようと隣の部屋のあたりにかたりと物音がしたからで、それとても箸が倒れたぐらゐのことに過ぎないのに、いつたいそんなことになぜ愕然と膽をひやすかといへば、つまりこの日ごろわたしはある男につけ狙はれて絶えず生命をおびやかされてゐるためにほかならぬ。

ここは目黒もずつと奥のはう、省線からかなり離れ

た杉林の隅にある一軒建の家で、わたしはその庭に面した六疊一間を借りて、殺風景な獨りぐらしをしてゐる。わたしのいのちを狙ふ相手といふのはいつもこの家に出入をするわかもの一人で、それは新宿界限に巢くふ鐵砲政と呼ばれた無頼漢であつた。こちらの身には政の怨を買ふおぼえさらになく、何とも迷惑の至りであつたが、政は政なりにどこに柄を上げてゐるのか多少思ひ當るふしがないではなかつた。そもそもわたしがこのに居を定めてから二年以上になるのだが、収入の宛もない身のこととて部屋代は滞る一方、最近十ヶ月あまりといふもの不義理を重ねてゐるにも係らず、この家の主人夫婦、五十がらみの柔和な人柄の夫も細君も、ついぞいやな顔一つして見せるでなく、それどころか朔日十五日には小豆飯、彼岸には牡丹餅、正月は雑煮に添へて二合徳利を一本、萬事行届き過ぎるほどの厚遇ぶりであつた。さういふとき給仕に出て